



武藏河ぶみ  
巻

13  
3582  
2



門 13  
號 3582  
卷 2



武藏録卷之二

名器の守護

足利政知公鎌倉を鎮め伊豆國堀越小館と管之あり  
後任のふより世人是より堀越殿と稱しなる然小館後  
移乃嘉儀とて大宴と段諸侯と御長進あるふ付御好の  
道おれを茶事とも催され此度新館造管ふ付別と勤勞の  
多賀豊後守高忠次上客と堀越殿御手づろ茶と豆  
てりてかゝる者濃茶一頓とて高忠懐で御茶器囊茶

早稲田 大学 図書館  
35.2.2  
蔵書

抄本致とて拜見と此日用の以茶器ハ華物也蜀江乃錦  
の囊くるる日本必二乃名器ハ原ハ東山殿ハ華人より献上せしと  
一至伊豆の國人世良田入道良忠ハ男太郎良勝謀致せしきま  
政知ハ馳りて不日小逆徒を伐平凱陣ありて東山殿大  
感賞あつて件の茶器と檢賞ハ賜政知公大ハ怡び自  
茶入の銘を勝興とて所宮の蓋裏ハ手つろ銘なるハ花押  
と書附らる是ハよ人皆勝興乃茶入と稱し多此日の茶器  
ハ即ち是なり高忠も茶道の好人かれハ名器ハ見とれて目も

放さむ堀越殿其執心の所我御覽あり微笑し仰々  
高忠ハ其茶器と欲さる今般普結成就せしハ偏ハ郷が  
働きたれハ其檢賞とて予ハ秘藏たれども其器と得さ  
るハ長々家の什物とせよと仰々高忠夢うとむ悦  
ハ遂ハ勝興乃茶入を拜領ハ深く君恩と謝しまりて退  
出ハ鎌倉の邸舎ハ歸著して藩中の士ハ名器拜領の坡  
露し怡悦限なく朝夕是と見て心ハ慰らるる或日堀  
宗右衛門を招た件の茶入を取出して曰此器ハおがらげあり



これい  
 あつがえ  
 志あひ  
 あぐりの  
 たうと  
 いまはて  
 くら  
 せい



そのか  
 これまの  
 きんうみ  
 め△て  
 そみやり  
 とうと

武蔵録二

ぬ將軍家の御秘藏お上堀越殿御自筆の御銘と  
 書附のむ我家是小上と密なり。茲を大切の上おも大切  
 おせでん叶を你細工人を擇る。此管の外囊はく外管とも  
 念と入造りあよと命トぬハ宗右衛門承望是ハ御を  
 かも仰せら幸うふ京師の囊縫祐甫とや者下里合せの  
 間外囊ハ渠小命ハ外管も名人の指物司お造らせし人と  
 して高忠怡び茲を茶入を你小預る間一日も早く造りあ  
 せよと勝興乃茶入を了させり。宗右衛門各器と繕り

下宿して即時小祐甫と招れ寄至命の趣を述て外囊  
 成あつたれが祐甫領送して先茶器と取出し拜見し賣  
 續し元のく収め借官乃手法を尺と委く書田明日よ  
 呈縫うまぬりしておと出末の日分約し祐甫ハ旅宿  
 へうりたり。然る処小賀殿より使者来り。本國の政事付  
 火急小商議とる。即出仕を告る。告ふ  
 おと堀是ハ何更也と思ながら畏れと領掌して使者を  
 へう子息宗三郎小向ハ皮如く主君より火急の召あまを

我ハ出勤甘んば叶ハを你ハ床の間なる茶入を守護せよ行儀  
 の品より深更及人とも量かじ。されを終夜睡を添たて  
 茶入の守護怠る妻なれと厳命に其身ハ僕をつれ  
 出仕をぞたふさる。却説大野銀四郎ハ何卒堀宗三郎小  
 越度をとせ悪の意趣を暗さんとの。其使と窺ハ今  
 日宗右衛門ハ勝興乃茶入を預りてさるよと皮須波や  
 究竟の妻と出来たり我其茶入を奪ひたり宗三郎小  
 自滅させんと忽ち悪計を生じ一種の者と一瓢乃酒を携

堀ガ郎舎おのりたれば婢女ハ奥へ往く。銀四郎主来り又  
 告ぐるを宗三郎ハ大野ウ斯まど害心然さるまじと  
 ハまらむ。是ハよれ時来れり是ハ通らるや中せと云  
 おより。婢女ハ立出る。奥へ御通りわれと緒を銀四郎緒  
 して奥の間に到る宗三郎立て是を迎へ至客座定まら  
 後銀四郎此程の疎遠をいひ偕曰今日先生ハ勝興乃  
 茶入を預りて承る。天下ハ名高丸名器なる折お  
 拜見せむ。再ハ拜む時ふる。是れ由急失礼を顧じ

て推参せりありれ一期のおのひ出ふ何卒内分なから拜見を  
 免しぬる。生涯の本望するなと緘しやうのひをれを宗三郎  
 何の氣もつらと実それハ神妙乃心かけ今宵一夜ハ私宅お  
 預りハ見え申なす必を他言無用なりと口止床の上段より  
 茶入の管を敬々しく取おし紐を解て茶器を出しお掛け  
 せし銀四郎二月より奪取て飛も去るおのひもことごと  
 く心を押鎮おどろくながめて感嘆。世の二つとたれた名  
 器を拜見して生涯の徳を得先く大功の品収めぬとく

と一戻しぬれハ宗三郎のどく収め又上段ふるを置たり  
 銀四郎ハ座を起り兼て準備す酒肴をとり来り今日  
 我朋友より一種至来せしゆも不調法なる牛料理のく々  
 めく貴兄と二盃を傾しめ携て来りハ先生ハ御出勤の届  
 守とあれを幸の打なりいざ盃酌しゆるとも小笛守を守り  
 小之とお解がゆる勧めぬれハ宗三郎ハ大切の品と守護する身  
 小酒を用ひ人を慎むれ小似たりと辞せども猶再三勸る小  
 酒已更を得とぬるをよれ程小納めぬとく盃をとりわけ

是より内侍のつとめつとて敵うが、多ふ大野の何卒宗右衛門  
が飯宅せざる内ふ宗三郎を酔ふせ茶入を奪ひとらん左  
右ふ事よせて酒をまひくれども宗三郎の大事と志心と先  
父如く今宵の酒を過すば貴所ふ十分用ひの久と辞むと  
銀四郎呵々とこゝろ此瓶の酒何程う有る先づ中  
飲めんと釘を巧申と又四五盞まひくれば宗三郎の思ふを七八  
分お辭今ハ一滴も飲がず貴所盃を扱め又の飯宅なき内ふ  
早う中とのとをふと銀四郎も困もて其を其意ふ

まうせゆりと不益な扱め別れ告て座とまゝるが心中あま今  
夜是非とも本意と達せしめんと婢女ふいと急し門を明  
る音よせて又内より引ま志の足と奥庭へりり植菴の中  
ふ潜り隠息かつめとを窺ひたる

非道乃圍害

世の縁ふ守人の隙のあれども盗人の隙のわたりとてぐり堀  
宗三郎の大野が泉載お潜隠るるとハ夢あもあまを父の  
飯宅と公やくと待ち時計ハ早四ツ半とてども宗右衛門





正徳金二

ハ猶ろくど宗三郎が母真弓の夫の遅れを案案ト座敷に往  
 宗三郎小向ハ今宵之何ゆ夫乃御之りの遅やと向宗三  
 郎も待ひて。されを何ゆ遅おりのゆん平日あつて御迎が  
 動止と向小参るなれども大切の品守護をせむ心不任  
 として母子終結お及び内三更ありぬ。宗三郎母小向  
 御身の風邪いまさあぬれを聞ふく休と申す。其内お  
 又も飯屋のふなりと練小より母の実もとて圍に往たり。宗三郎  
 ハ燈下小書物ひらた眠を去のびくながめ居るふ身小綱

ひの及ぶる時節や酒の酔漸々増す頻に祈むり  
 萌しる我猶睡トと氣成厲せども。うう我成忘れ  
 書物小白をわておぐ。免首ふたむと寐入る。此時すて  
 銀四郎ハ植菴の中お潜々隠ま。蚊のさそを堪て窺ふ  
 小頃之七月廿四日の月も雲間より出る泉載の多く追  
 及えらる。障子乃内小宗三郎が鼻幽小安のふを須波  
 や時節至来せりと。ねれ足と板縁乃ゆと歩より。ちら  
 這して母と傾けおふいよく寐个体おれが独るふつたて

水鉢の柄杓をとりて水汲上鴨居ふ是と流し障子ふきと  
 うけとる門用ふ水みちりて音もせむ仕まゐりたりと  
 去のび足と床の間へ歩まより茶入の宮ととりて袂へ入ま  
 われ足ふ立出と障子ととりて引立庭樹の松ははらひて  
 高堀ふ登りて忍返し成辛しとのり越大地ととどき  
 たる此時堀宗在唐門の絆襪よふやととて僕も提灯を  
 提せ我邸迎に三枚橋をとりて過何心なく向ふを見れば  
 我邸の高堀より飛下る曲者あるふと須波盗賊ととりて

声小僕と周障て提灯投捨橋ととりて逃ちる宗右衛  
 門之氣というち走里寄んとて忽地石おはまつる俯小使  
 ながら盗賊ありと叫ぶ成大野の声をききしと腰刀と抜  
 け早く肩夾へおせむ再び斬くと閃くと刀はなきて起上り  
 痛手ありふ抜合し三合お合し曲者の面をるれば思もよ  
 らぬ大野なるふと你ハ銀四郎なると申とより間しあらせむと  
 銀四郎が斬込血氣の一刀ふまきも肩夾深く斬下られとと  
 もあふと付まきより独る山宗三郎の堀の外ふ盗賊ありととふ



髪を切る  
髪を切るの  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る



髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る

髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る  
髪を切る

声小同然さ返して太ふ抱えられ床の向とられぬ茶入の管を  
 是はいふと惆なう。其とう刀ふけ出門乃々をを押し  
 此物音小銀四郎ハとめめ刺得と周障ふこめ何國とも  
 なく逃失う宗三郎表へけ出られぬ又宗右衛門が朱小  
 條く付き居るゆを急仰天へ急抱え起し耳小口を呼  
 生る是とやま真弓も婢女もちを出死骸ふと付位叫  
 宗右衛門とを有り有て息吹も口惜や銀四郎がぬおれ余  
 の死ととる渠奴が行方と尋ひ討て捨て我墓小平向よ

とつみ残り終る路上の露と消ぬ時行年六平一才宗三郎  
 ハ齒うをわし備ハ茶入の夜無賊又の仇ハ銀四郎たりと  
 て渠が屋敷へらうを踏破りてうけ合ぬも影も見えぬ  
 猶狂氣の如く東西南北をうけ廻て尋れども知れハせえ  
 うさなくと立歸ぬ死骸ハ己小郎肉へら入母と婢女の控頭  
 位跡近隣の人々の傍小集りて高議して居るうらうら宗三  
 郎が歸ると迎て各悔を述銀四郎が行方やまぬると同宗  
 三郎烟あう小諸方を尋れども影も見えぬと己小大切の

武藏鏡三

十一

茶室を盗まきり上六中納の切腹し何卒母の助命を願ひのりいとも已れ生害み及んと人々孩れと押止め是ハ物小狂り先言上せし上り免も角もなりと練めり之頃て緒士頭大山常大夫まで松を大山も亦孩れ先檢使とて焼山芝進滝邊岩十郎兩人を遣と兩士堀が郎金より元骸を拾め銀四郎が昨日来りより飯と追の一五二十と宗三郎小史糾し立りて遂一亦大山小告をれを大山多賀殿の御前小出堀が横死茶入紛失の一件を言上と

尋賀殿の外小孩れ大野が大罪言語道断なり急死捕をりて即剋追捕の人数を八方へむけられ倍堀宗三郎更茶室の守護を急里銀四郎小購れ名器と失ひ及て討せし其罪誣り重く刑罰を加ふれれども宗三傍門の前への勤功小免下死罪一統を匿家祿と没収し追放中付せし若器我奪返し大野と討り立歸を其時時宜小依て汝汝を告ありとの上意之大山承を滝邊を必く君命の趣を堀母子小中渡させたる宗三郎ハとも

死罪へのづれまゝと死を極も君命と待々る小死罪を  
 宥めぬらんとの上命と蒙り深く君恩に謝しなけ  
 るを滝辺の郎舎明の義といふとて立取りたり  
 宗三郎の父の死骸とて埋葬し婢女下僕小暇とて  
 せ郎舎と明渡しとて立出るとて八年未だ怨意  
 の朋友茶道乃以人などより思ふ小餞別とて宗  
 三郎母子深く謝して果たれ縁由を赴けり  
 復仇武藏鑑卷二終

六号ノ五